

宮古語久松方言の非自立の形容詞相当形式が語と分析できる環境<sup>1</sup>

陶 天 龍 (東京外国語大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC1)

## 1. 研究背景

久松方言をはじめとする宮古語諸方言には, taka「高い」, pukarasi「嬉しい, 楽しい」のような, 寸法・新旧・価値・色など, いわゆる形容詞のプロトタイプの意味 (Dixon 2004) を持つ形式がある。本発表では, このような形式を「形容詞相当形式」と呼び, 単独で叙述用法としては用いられない「非自立形式」(e.g. unu pžtoo taka pžtu「その人は 高い 人」) と叙述用法として用いられる「自立形式」の 2 種類に分けられる (e.g. kjuuja pukarasi (pžtužgaamaasi)「今日は 楽しい (一日だ)」, cf. 陶 2020)。

これまでの先行研究では, 非自立形式を語幹 (名嘉真 1978; Shimoji 2009) や語根 (Pellard 2009; Koloskova and Ohori 2008; 林 2013; 下地 2018 など) と呼び, 自立形式は, 典型的な形容詞相当形式が持たないような名詞的な性質を見せる (下地 2018), あるいは名詞とされる (林 2013)。一方, 陶 (2020) は, 非自立形式と自立形式は多くの共通した特徴を示し, 形容詞のプロトタイプの機能 (Dixon 2004: 10-11, 28) を有するため, いずれも形容詞の下位分類と見ることができることを主張したが, どのような環境で語と分析できるかについてははっきりと述べていない。また, 非自立形式と自立形式の形態的な違いも解明されていない。本発表では, 久松方言の非自立形式が語と分析できる 3 つの環境を提示し, 非自立形式と自立形式の形態的な違いを解明することが目的である。

## 2. 語の定義

## 2.1. Dixon and Aikhenvald (2002), Aikhenvald et al. (2020)

Dixon and Aikhenvald (2002), Aikhenvald et al. (2020) では, 語を音韻的な特徴と形態統語的な特徴によって, 音韻語 (phonological word) と文法語 (grammatical word) に分類している。音韻語は (a) 分節音の特徴, (b) 韻律の特徴, (c) 音韻規則のうちの少なくとも 1 つの特徴で定義できる (Dixon and Aikhenvald 2002: 13)。一方, 文法語は (d) 句に散らばっているのではなく, 常に一緒に現れること (結合性の基準, the criterion of cohesiveness), (e) 固定された順番で現れること, (f) 慣習化された結合と意味を持つこと, などの特徴がある (Dixon and Aikhenvald 2002: 19)。

また, Aikhenvald et al. (2020) では, 音韻語と文法語が従う音韻の特徴で決められた音韻的単位の階層と文法的特徴で決められた文法的単位の階層を提示している。

- (1) phoneme (> mora) > syllable (> foot) > phonological word > intonation group  
morpheme > grammatical word > phrase > clause > sentence (Aikhenvald et al. 2020: 2)

## 2.2. 下地 (2018), 下地 (2021)

下地 (2018: 53) では, 語を形態統語的自立性と音韻的自立性によって, 語・接語・複合語幹・接辞を定義している。

表 1 形態統語的自立性と音韻的自立性 (下地 2018: 53)

		音韻的に	
		自立	従属
形態統語的に	自立	語	接語
	従属	複合語幹	接辞

この音韻的に自立したものは Dixon and Aikhenvald (2002), Aikhenvald et al. (2020) における音韻語に当たり, 形態統語的に自立したものは文法語に相当すると考えられる。また, 下地 (2018) では, 形容詞相当形式と名詞の連続は統語的複合語と見なされているため, 形容詞相当形式 (=複合語幹) は音韻的に自立するが, 形態統語的に従属している形式だと分析されている。

また, 下地 (2021) は, 伊良部方言のいわゆる統語的複合語の語性を判断するために, 形態的緊密性 (a. 内部要素間に語の挿入が可能か, b. 内部要素の順序替えが可能か)・統語操作の可否 (c. 形容詞相当形式は独自の修飾要素を取り, 句を形成できるか (句の包摂), d.

<sup>1</sup> 本発表は JSPS 科学研究費補助金 (JP20J22719) による研究成果の一部である。

形容詞相当形式は疑問詞は疑問化できるか)・音韻語性 (e. 重子音化 (連声) が可能か, f. /ia/, /iu/ が 1 音節になるか, g. 形容詞相当形式が独自の韻律ドメインを持つか) の 7 つの現象でテストを行った結果, 「形容詞相当形式+名詞」は, 形態的緊密性においては語に似ているが (b については語と句の両方の性質を持っている), それ以外の現象においては句と同じであるという結論を出した。また, 統語的複合名詞を「語でも句でもない」他のレベルにおくか, プロトタイプの, 語と句に連続性を認め, その間に位置させるか, という 2 つの見方が可能だと述べている。

### 3. 久松方言の非自立形式が語と分析できる環境

本発表では, 下地 (2018) に従い, 語を「形態統語的にも音韻的にも自立している」形式と定義するが, 後述のように, 形態的自立性と統語的自立性のいずれかを持ち, かつ音韻的にも自立しているものを非典型的な (周辺の) 語と分析する。また, 語根を「語からすべての形態的操作を取り除いて残った形態素」と定義し, 語幹を「ある形態的操作が適用される部分」と定義する<sup>2</sup>。なお, 複合語の語幹は音韻的にも自立することもあれば, 自立しないこともあるが, 接辞は形態統語的にも音韻的にも自立しない。

本節では, 非自立形式が語と分析できる環境— (a) 非自立形式単独形・(b) 非自立形式+終助詞・(c) 非自立形式+名詞<sup>3</sup>—を詳しく検討してみる。(a) と (b) のような用法は, 管見の限りでは, 他の方言では報告されていない。

#### 3.1. 非自立形式単独形

久松方言では, 非自立形式は, 他の方言と同じように, 単独では叙述を表すことはできない。しかし, 感嘆・驚きを表す場合には, 単独で発話できる。(e.g. kupa!「固い!」(感嘆・驚き))。また, 非自立形式単独形は単独で発話するだけでなく, 文で発話することも可能である (e.g. unu kiija taka!「この 木は 高い!」)。

本発表の定義に従うと, kupa「固い」や taka「高い」は形態統語的操作が適用されていないため, 語幹ではない。また, 文で発話する場合, 仮に taka は語根であって文法語でないとすると, Aikhenvald et al. (2020: 2) が提示した文法的単位の階層 (morpheme > grammatical word > phrase > clause > sentence) に従うと, 語根 (morpheme) が文法語 (grammatical word) を経ずに, 最終的に unu koossa kupa! という文になるのは, この階層に違反する。そのため, kupa は形態統語的に自立すると考える。また, kupa と taka は単独で発話できるため, 音韻的にも自立していると考えられる。

つまり, 感嘆・驚きを表す非自立形式単独形は形態統語的にも音韻的にも自立しているため, 語であると考えられる。

#### 3.2. 非自立形式+終助詞

久松方言では, 非自立形式は終助詞が後続することが可能である。たとえば, 久松方言保存会 (2020: 25) には, imi=jaa「小さい=ね」<sup>4</sup>という項目がある。=jaa 以外に, =doo「~よ」, =na「~か (可否疑問)」なども後続できる<sup>5</sup> (e.g. unu issa {iv'jaa/ivdoo/ivna?}「この 石は {重いね/重いよ/重いのか?}」)。

=jaa, =doo, =na はいずれも節をホストとする接語であり, 非自立形式だけでなく, 名詞・

<sup>2</sup> この定義は, Haspelmath & Sims (2010: 36) における「語基」の定義である。「語基」という用語を使う先行研究が少なく, 名詞や形容詞相当形式など, 屈折接辞が後続しないものを「語幹」と呼ぶ研究も少なくない (たとえば, 下地 (2018: 86) では, 語幹を「語から屈折接辞を除いた単位」と定義したのにも関わらず, 派生接辞のみが後続する名詞や, 接辞添加が適用されない複合語の各部分についても, それぞれ, 名詞語幹や複合語幹などと呼んでいる)。このように定義すると, 接辞添加だけでなく, 重複や複合が適用される部分も語幹と呼べるようになる。

<sup>3</sup> 本発表でいう「非自立形式+名詞」は明らかに複合語であるもの (e.g. akamta//aka+mmta//「赤い+実」「野イチゴ」) が含まれない。

<sup>4</sup> 原文は「イミィ ヤー」と仮名で表記されている。音素表記は発表者による。

<sup>5</sup> 疑問詞疑問文の終助詞 =ga は形容詞相当形式の単独形に後続できず, 非自立形式に動詞化接辞 -kar がついたあとに後続するのが一般的である。疑問詞疑問文では, 疑問詞が焦点となり, 焦点助詞を取る。焦点助詞が動詞化接辞と共に起る傾向があることが原因だと考える。平良方言 (Koloskova & Ohori 2008: 620)・(西原)池間方言 (林 2013: 118)・伊良部方言 (下地 2018: 214–215) などでもこのような現象が報告されている。

動詞にも後続できる。この場合、iv「重い」は、非自立形式単独形の場合と同様に、接辞添加などの形態的操作が適用されていないため、語幹ではない。また、仮に iv「重い」は語根であって文法語でないとする、3.1 と同じように、語根 (morpheme) が文法語 (grammatical word) を経ずに、最終的に文になるため、Aikhenvald et al. (2020: 2) が提示した文法的単位の階層 (morpheme > grammatical word > phrase > clause > sentence) に違反する。そのため、iv は形態統語的に自立すると考える。

音韻的自立性については、まず、形態素境界では、音の交替が起こらない。=jaa を例にすると、/iv'jaa/ は [ivʔja:] という音形で実現し、[iv'a:] のようには音の交替が起こらない。この点においては、非自立形式は音韻的に自立していると言える。

また、アクセントについては、接辞がつく場合と接語がつく場合はアクセントが異なることがある。久松方言のアクセントに具体的にどのようなパターンがあるか現時点では不明であるが、少なくとも以下のことがわかる。現時点では、非自立形式についても自立形式についても、kžmu+kagi ([心+きれい]「優しい」、LHLH or LHHH) のような複合語由来の自立形式を除いて、単純形式や単純語に HLH のようなアクセントパターンが観察されず、また、LH...H や H...H のように H で終わるアクセントパターンがほとんどである<sup>6</sup>。例外としては、agjaacim という自立形式があげられる。algjalalci|im (|はモーラ境界を表す) のアクセントは LLHLL である。そのため、接辞がつく場合は、非自立形式も自立形式も接辞の直前で H になるが (e.g. ilv|kala<sup>7</sup> は LHHL, algjalalci|mkala は LLHHHL になる)、接語の直前では、それぞれのアクセントが保たれる (e.g. ilv|jala は LHHL, algjalalci|mljala は LLHLLHL)。ただし、ほとんどの形式はアクセントが H で終わるため、接辞がつくときのアクセントと接語がつくときのアクセントが同じであるが、agjaacim のようなアクセントパターンが例外な自立形式では、その違いがはっきりと現れる。そのため、接語の前の非自立形式もそのアクセントが保たれると考え、音韻的に自立していると言える。

つまり、「非自立形式+終助詞」における形容詞相当形式は、形態統語的にも音韻的にも自立していると考え、語と分析できると考える。

### 3.3. 非自立形式+名詞

「非自立形式+名詞」は多くの先行研究では、複合語と分析されている (林 2013; Koloskova and Ohori 2008; セリック 2018; 下地 2018 など)。本節では、下地 (2021) と Dixon and Aikhenvald (2002) を参考にして、久松方言における非自立形式の自立性をテストするパラメーターを以下のように設定し、テストを行う。また、一般的な合成語・句とも比較してみる。

#### (2) I. 形態的自立性

- i. 【語の挿入】「非自立形式」と「名詞」の間に他の語が挿入できるか。
- ii. 【順序替え】「非自立形式」が 2 つの場合、順序を変えることが可能か。

#### II. 統語的自立性

- iii. 【句の包摂】「非自立形式」のみが項を取ったり、修飾されたりすることは可能か。

#### III. 音韻的自立性

- iv. 【音節の特徴】「非自立形式+名詞」の境界にある音節は 1 音節になることが可能か。
- v. 【アクセント】それぞれのアクセントが保たれるか。
- vi. 【音韻規則】/j/ は前の子音による同化現象が見られるか。

(2)i 【語の挿入】については、陶 (2020) で報告されているように「非自立形式+名詞」の間には典型的な語が挿入できないが (e.g. \*naga unu mci 「長い その 道」), 今回の調査では、伊良部方言と同様に、一部の「非自立形式+名詞」に他の形容詞相当形式が入ることが可能であることがわかった (e.g. imi bžda kii 「小さくて 低い 木」, \*naga iba mci 「長くて 狭い 道」)<sup>8</sup>。一方、ikasareetaa //ik-sas-a-ree-tar// 「行く-使役-語幹派生辞-受身-過去」 「行かされた」

<sup>6</sup> 形容詞相当形式だけでなく、名詞や動詞においてもほとんど観察されていない。

<sup>7</sup> -kaa //kar// は形容詞相当形式の動詞化接辞である。

<sup>8</sup> 下地 (2021) では、伊良部方言において、形容詞相当形式が 2 つの場合、2 番目の形容詞相当形式が疑問詞になることが可能だと述べられている (e.g. azima-japa-mucii 「甘くて柔らかい餅」→azima-nausinu-mucii 「甘くてどんな餅」)。本発表では、これを一種の語の挿入現象と考え、久松方言では、「非自立形式+名詞」の場合は間に noobasinu 「どんな」の挿入が不可であるが (e.g. \*imi noobasinu kii? 「小さくて どんな 木?」),

や *akamta* // *aka+mmta* // [赤い+実]「野イチゴ」<sup>9</sup>のような一般的な合成語は、間に他の語が入ることはできない。

(2)ii【順序替え】については、形容詞相当形式が2つとも「非自立形式」の場合は、順序が変えられるものと変えられないものがある (e.g. *imi bžda kii*「小さくて 低い 木」→ *bžda imi kii*「低くて 小さい 木」、*ngja kupa koosi*「苦くて 固い お菓子」→ *\*kupa ngja koosi*「固くて 苦い お菓子」)。一方、句の場合はこのような制限が見られないが (e.g. *unu tužnu pani*「その 鳥の 羽」→ *tužnu unu pani*「鳥の その 羽」)、一般的な合成語はこのような交替が不可能である (e.g. *ikasareetaa* // *ik-sas-a-rec-tar* // 「行く-使役-語幹派生辞-受身-過去」「行かされた」→ *\*ikareesasitaa* // *ik-a-rec-sas-i-tar* // 「行く-語幹派生辞-受身-使役-語幹派生辞-過去」「\*行かれさせた」)。

(2)iii【句の包摂】については、久松方言の非自立形式は副詞句に修飾されることも (e.g. *[uijužžamai taka] kii*「それよりも 高い 木」) も、項を取ること (e.g. *[kaanu japa] muci*「皮が 柔らかい 餅」) も可能である。句も同様であるが (e.g. *[mizzu numtaa] pžtu*「水を 飲んだ 人」)、*ikasareetaa*「行かされた」や *akamta*「野イチゴ」のような合成語は、その一部 (たとえば、*ikas-*の部分と *aka*の部分) のみが副詞に修飾されることも、統語的補部を持つことも、項を取ることにも不可である (e.g. *\*[uijužžamai aka]mta*「直訳：それよりも 赤い 実」)。

(2)iv【音節的特徴】については、「非自立形式」は境界にある音は1音節にはならない (e.g. *iv isi*「重い 石」[*iv.ʔi.si*], *\*[i.vi.si]*)。また、句も同様である (e.g. *im jataa*「海 だった」[*im.ʔja.ta:*] *\*[i.mʲa.ta:]*)。一方、音韻語内では、語中音節が母音で始まったり、コーダのある音節の次の音節は、母音や半母音で始まることはない。そのため、合成語であっても1音韻語であれば、このルールにあてはまる。

(2)v【アクセント】については、「非自立形式」も「名詞」も元のアクセントが保たれている (e.g. *v|da|pžtu*「太い 人」LHLH, *\*LHHH*)。また、句についても同様である (e.g. *ikž|tal|a|pžtu*「行った 人」LHHHLH, *\*LHHHHH*)。ただし、名詞や動詞などの自立語 (1音韻語) では HLH のパターンが観察されないため、*ika|sa|re|e|ta|a*「行かされた」(LHHHLLL) と *a|ka|m|ta*「野イチゴ」(LHHH) は1音韻語であることがわかる。(cf. 注9)。

(2)vi【音韻規則】については、通常の複合語では連濁が起こりうる (e.g. *aka+vva* (<ffa)「赤い+子」「赤ちゃん」、*bžda+bana* (<pana)「低い+鼻」「最低の人間」)。一方、「非自立形式+名詞」の場合は、基本的に連濁が不可である (e.g. *cuu saki*「強い 酒」、*\*cuu zaki*)。ただし、現時点では1例の例外が見つかり、「非自立形+名詞」の名詞は *kii* の場合、連濁が任意である (e.g. *{taka/bžda/naga...} {kii/gii}*「{高い/低い/長い} 木」)。また、この場合は、(2)iii【句の包摂】も可能である (e.g. *[judanu naga] {kii/gii}*「枝が 長い 木」)。一方、句の場合は、連濁が不可である (e.g. *uman aa {kii/\*gii}*「そこに ある 木」)。

表2 非自立形式の自立性判断テストおよび合成語 (自立語) と句との比較

パラメーター	一般的な合成語	非自立形式+名詞	句
I. 形態的自立性			
i. 語の挿入	×	△ <sup>10</sup>	○
ii. 順序替え	×	△	○
II. 統語的自立性			
iii. 句の包摂	×	○	○
III. 音韻的自立性			
iv. 音節的特徴	1音韻語	2音韻語	2音韻語
v. アクセント	1音韻語	2音韻語	2音韻語
vi. 音韻規則	連濁可能	連濁不可 (1例は任意)	連濁不可

(○...可, ×...不可, △...一部の形式や構文のみ可)

「自立形式+名詞」の間には *noobasinu*「どんな」の挿入が可能である (e.g. *gabasjaa noobasinu in?*「大きくて どんな 犬?」)。

<sup>9</sup> *akamta* という語は、もともと複合語であったが1つの自立語になったと考える。複合によって、*mmta*「実」が音声的に *mta* となったため、*mta* は「実」という意味で単独で発話できず (*mta* は「土」という意味である)、*aka* と *mta* の間に他の語が入ることもできない。また、*a|ka* と *m|m|ta* のアクセントはそれぞれ LH と LHH であるが、*a|ka|m|ta* のアクセントは LHHH であり、LHLH ではない。そのため、*akamta* は形態統語的にも音韻的にも1語である自立語だと考える。

<sup>10</sup> 一部の形容詞相当形式のみが挿入可能である。

表 2 からわかるように、形態的自立性を除いて、「非自立形式+名詞」は語（一般的な合成語）より、むしろ句に近い。これは下地（2021）で報告されている伊良部方言の結果と同じである。

また、2.1 で言及した Dixon and Aikhenvald（2002）が提示した音韻語の特徴である（a）分節音の特徴、（b）韻律の特徴、（c）音韻規則はそれぞれ、表 2 の（iv）－（vi）に相当し、いずれの特徴も「非自立形式+名詞」と句の両方が共有している。一方、文法語については、（d）句に散らばっているのではなく、常に一緒に現れること、（e）固定された順番で現れること、（f）慣習化された結合と意味を持つこと、などの特徴を持つと述べられているが、表 2 からわかるように、少なくとも一部の「非自立形式+名詞」は、間に他の形式が入ることができ、常に一緒に現れるとは限らない。また、少なくとも一部の「非自立形式+非自立形式+名詞」の 2 つの非自立形式は順序が変えられるため、名詞と 1 つの文法語を成さないことがわかる。そして、すべての「非自立形式+名詞」は生産的でかつ意味が透明である。これは、Dixon and Aikhenvald（2002）が提示した文法語のいずれの特徴にも当てはまらず、例外がある。

しかし、Dixon（2004: 10–11, 28）では、形容詞には、典型的に（a）叙述、（b）名詞修飾の 2 つの機能があるが、一部の言語の形容詞はどちらか一方の機能しか持たないと指摘されている。また、一部の言語の形容詞は、（c）比較構文、（d）基本形あるいは派生形で動詞修飾する機能を持つと述べられており、陶（2020）では、久松方言の「非自立形式」も「自立形式」も類型論的に形容詞の特徴を有していると報告している。そのため、本発表では、下地（2021）が提示した「語と句に連続性を認め、その間に位置する」という見方に従い、久松方言の「非自立形式+名詞」を句寄りの形式（非典型的な句）と分析し、その中にある「非自立形式」を語幹と語の連続にある語寄りの形式（非典型的な語=形容詞）と分析する。なお、ここでは「形態的自立性と統語的自立性のいずれかを持ち、かつ音韻的にも自立している」形式を非典型的な語と定義する。

#### 4. 非自立形式と自立形式の形態的な違い

3.1 で述べたように、非自立形式は単独でも発話できるため、単独で発話できるかによって非自立形式と自立形式を区別することができない。本節では、2 モーラ形式 33 個、3 モーラ形式 21 個、4 モーラ以上の形式 17 個の計 71 の形式を、陶（2020）で提示された非自立形式と自立形式の 1 つの違い—コピュラ（=du jataa 「だった」）が後続できるかどうか—を基準に、非自立形式か自立形式かを判断する。テストで使われる形容詞相当形式は表 3 にまとめる。

表 3 自立性判断で使う形容詞相当形式

モーラ数	形容詞相当形式
2 モーラ	taka 「高い」、naga 「長い」、upu 「大きい」、ara 「新しい」、apa 「味が薄い」、aci 「暑い」、bžda 「低い」、imi 「小さい」、japa 「柔らかい」、kagi 「きれい」、kara 「辛い」、kupa 「固い」、kuma 「細かい」、pžži 「寒い」、pžžu 「広い」、ffa 「暗い」、ffu 「黒い」、ssu 「白い」、mma 「美味しい」、ngja 「苦い」、nku 「暖かい」、vda 「太い」、baž 「悪い」、fiž 「古い」、iv 「重い」、kaž 「軽い」、kiv 「煙たい」、nn 「似ている」、oo 「青い」、pai 「似合う」、pjaa 「早い」、pžž 「薄い」、cuu 「強い」
3 モーラ	azima 「甘い」、pžguru 「冷たい」、ikjara 「少ない」、kanasi 「かわいい」、manai 「大人しい、器用だ」、mzigi 「醜い」、sidasi 「涼しい」、nifita 「眠い」、sabžsi 「寂しい、静かだ」、abžž(j)a 「大きい」、jaara 「柔らかい」、teesi 「簡単だ」、kžžru 「黄色い」、maaku 「丸い」、kaasi 「貧しい」、jaasi 「ひもじい」、javva 「意地が悪い」、pinna 「変だ」、panta 「忙しい」、ssjana 「汚い」、gabjoo 「細い」
4 モーラ以上	aparagi 「美しい」、umussi 「面白い」、uturusi 「恐ろしい」、pirumasi 「不思議だ」、muzikasi 「難しい」、pukarasi 「嬉しい」、ngjamasi 「うるさい」、pazikasi 「恥ずかしい」、kžmukagi 「優しい」、kžmujana 「意地が悪い」、kžmupžguru 「心が冷たい」、agjaacim 「かわいそうだ」、gabasjaa 「大きい」、jum'jasi 「読みやすい」、jumpada 「読みやすい」、jumgaa 「読みにくい」、jumbusi 「読みたい」

その結果、2 モーラの形式はすべてコピュラを後続させることが不可であるが、4 モーラ

以上の形式はすべてコピュラを後続させることが可能である。

一方、3 モーラ形式は、ほとんどコピュラが後続することが可能であるが、jaara「柔らかい」と teesi「簡単だ」の2語のみコピュラの後続が不可である。

現時点では音節構造と関係があるかどうかは不明であるが、この2つの形式はいずれも CVVCV の形式であり、他に kžžru「黄色い」、maaku「丸い」、kaasi「貧しい」、jaasi「ひもじい」もこの形式である。また、kžžru は \*kž + iru「黄+色」から由来し、名詞の iru「色」が含まれており、maaku は名詞「丸」としても使えるため (e.g. maakuu kakž // maaku=ju kak-ž-Ø //「丸=を 書く-語幹拡張辞-非過去」「丸を書く」)、コピュラが後続できることも当然である。もし、音節構造と関係があるのであれば、なぜ CVVCV の音節構造を有する形容詞相当形式のうち、kaasi「貧しい」、jaasi「ひもじい」はコピュラが後続できるが、jaara「柔らかい」と teesi「簡単だ」はコピュラが後続できないか、現時点では不明である。

まとめると、「非自立形式」と「自立形式」の形態的な違いは、ごくわずかな例外を除いて、「非自立形式」は2モーラ以下であり、「自立形式」は3モーラ以上であると結論づけられる。また、統語的な違いは、コピュラが後続できるかどうかの違いであると言える。

## 5. まとめと今後の課題

本発表では、非自立形式が含まれる3つの環境—(a) 非自立形式単独形・(b) 非自立形式+終助詞・(c) 非自立形式+名詞—について、例を挙げながら、語と分析できることを説明した。このうちの(a)と(b)にある非自立形式は、語と分析しないと、Aikhenvald et al. (2020) で提示された文法単位の階層に違反すると説明した。一方、(c)にある非自立形式は、下地 (2021) で分析されている伊良部方言と同じように、形態的には自立しておらず、統語的・音韻的には自立しているため、本発表では、これを語幹と語の連続にある語寄りの形式、つまり非典型的な語と分析した。また、非自立形式と自立形式の形態的な違いは、ごくわずかな例外を除いて、非自立形式は2モーラであり、自立形式は3モーラ以上であると考えた。その統語的な違いは、陶 (2020) でも報告されているように、コピュラが後続できるかどうかの違いであると考えた。

また、本発表では言及できなかったが、久松方言では jum'jasi「読みやすい」のような形式が存在する (cf. 表 3)。jum'jasi は [jum'jasi] ではなく、[jumʔjasi] という音形で実現し、またアクセントも LHLH であるように、jasi「～やすい」は音韻的に自立していることがわかる。一方、jum'jasi の jasi は統語的に自立していないようであるが (例えば、jum'jasi の一部が他の要素による修飾ができない。e.g. \*[nukaanuka jum']jasi「\*ゆっくり 読み やすい」)、形態的には自立しているように見える。その理由は重複のときに、jum'jasi 全体が重複だけでなく、jasi のみが重複することも可能だからである (e.g. jum'jasii~jum'jasi「重複~読みやすい」あるいは、jum'jasii~jasi「読む 重複~やすい」)。jasi は統語的には自立していないが、形態的・音韻的に自立しているため、本発表で定義した非典型的な語と分析することができる一方、複合語の語幹も音韻的に自立可能であり、語幹の重複 (部分重複) と見ることでもある。現時点では、どの分析が妥当であるか不明である。今後の課題とする。

### 参考文献：

- ▶Aikhenvald, Alexandra Y, R. M. W. Dixon and Nathan M. White (2020) The essence of 'word'. in Alexandra Y. Aikhenvald, R. M. W. Dixon and Nathan M. White, eds., *Phonological Word and Grammatical Word: A Cross-Linguistic Typology*, 1–24. Oxford: Oxford University Press. ▶Dixon, R. M. W. (2004) Adjective classes in typological perspective. In Dixon, R. M. W., and Alexandra Y. Aikhenvald, eds., *Adjective classes*, 1–49. Oxford: Oxford University Press. ▶Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) Word: a typological framework. in R. M. W. Dixon, and Alexandra Y. Aikhenvald, eds., *Word, A Cross-Linguistic Typology*, 1–41. Cambridge: Cambridge University Press. ▶Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding Morphology*, 2nd edition. London: Hodder Education. ▶林由華 (2013)『南琉球宮古語池間方言の文法』博士論文。京都大学大学院文学研究科。▶久松方言保存会 (2020)『久松方言集』沖縄：(株) 近代美術。▶Koloskova, Yulia, and Toshio Otori (2008) Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language: A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in language* 32 (3) : 610–636. ▶名嘉真三 (1978)「沖縄県宮古久松方言の形容詞」『日本語研究』1. 東京都立大学国語学研究室。▶Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Ph.D. thesis, École des hautes études en sciences sociales. ▶Shimoji, Michinori (2009) The adjective class in Irabu Ryukyuan. 『日本語の研究』5 (3): 33–50. 日本語学会。▶下地理則 (2018)『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版。▶下地理則 (2021)「南琉球宮古語における複合と語性 (wordhood)」『宮岡文庫』開設記念特別企画公開シンポジウム「地球規模の言語研究から日本語を再考する」発表資料、オンライン開催、2021 年 4 月 25 日。▶陶天龍 (2020)「宮古語久松方言の形容詞相当形式の語としての自立性」日本語学会 2020 年秋季大会発表予稿集, pp. 9–16.